

小学校におけるアート空間の創出—弘前大学教育学部附属小学校の試みを通して—

蝦名 敦子 ・ 塚本 悦雄

本稿は、小学校に整備されたアート空間の試みについて、建設に至った経緯と目的について振り返り、小学校の環境における、新しい場所を創出する意味について検討したものである。とくに、学校における環境と美術という視点から、どのようにデザインがなされ建設に至ったか、完成までのプロセスに着目した。

以下の内容で構成されている。第一に、子どもたちが集団生活を通して学習する場である、学校という環境の諸問題について実態を振り返る。第二に、2011年に着手し完成した中庭（パティオ）の整備に焦点をあてる。学校内にアート空間を取り入れた点について、その経緯を説明するとともに、手を入れる前とその後の変貌について紹介する。とくにそのデザインについて、弘前大学教育学部美術教育講座の塚本悦雄氏が担当した。第三として、完成後の状況について言及し、今後の活用のあり方について展望する。そして最後に、こうした場を学校内に整備することの意味と課題について、現段階での状況から明らかにする。

筆者(蝦名)は2009年から3年間、弘前大学教育学部附属小学校長として管理職の立場から学校運営に関わった。その間、児童の教育や遊びを通して、安全などの観点から、ハードとしての学校における環境の問題についても考えさせられる点多々あった。そうした中で2011年に同大学教育学部附属小学校において、中庭(パティオ)がアート空間として整備される機会が得られた。またそのデザインを塚本悦雄氏が担当した。どのように発想し、デザインに至ったかについて、本稿では制作者の思考が明快に記されている。

この新設の場所が小学校という敷地の中で、どのような意味をもつのかは、これから実際に使用されるその仕方で決まってくる。長い目で、教員や子どもたち、保護者に対して学校にこのような場があることを理解してもらい、大いにご活用頂けることを心から願ってやまない。

アート空間を見て、触れてどのように感じ、活用していくのか、そこに教師や子どもたちの創造力が問われている。四季折々に窓の向こうに常に見えて、しかも鑑賞に堪え得る彫刻作品、造形空間が存在する。そのことが、子どもたちの感性に何らかの影響を与え、創造力が発揮される動機づけになれば、学校の中にアート空間を設けた最も意味のあることである。新たな造形空間からユニークな教育空間としても展開されていくことを切望している。

